

Newsletter

No. 8 March 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

旧交を温める

チリをはじめ中南米各国では、JICAの支援により日本で研修を受けた医師や、チリにて開催されていた日本人医師による講習会に参加した医師が多く、彼らは現在もそれぞれの母国で日本から学んだ知識、技術を活かし消化器疾患の診断、治療に活躍しています。

私が大学を卒業し本学第一病理学教室(現・人体病理学分野)の大学院生となった15年前は、毎年夏から秋にかけて中南米の医師に対する病理診断講習会が本学で開催されていました。コースリーダーの中村恭一教授(当時)のもと、全国から消化管疾患の診断・治療のエキスパートたちが講師として招かれており、世界最先端の知識・技術を学ぶことのできる講習会でした。若手医局員であった私は、講師の先生方のスライド係や、懇親会要員、また研修生のお世話などを仰せつかっておりました。自分とほぼ同世代の研修生が多く、講習会が終わった後や週末には、観光地を案内したり、和食レストランに連れて行ったり、私の母に頼んで自宅で手料理を振る舞ったりもしました。講習会は2006年に終了し過去のものとなりましたが、何の因果か南米に赴任することになった現在、当時の研修生と再会する機会に恵まれるようになりました。先日訪れたエクアドル・キトでは、15年ぶりの再会が実現しました(写真)。また私が医師になる前に日本で研修を受けた医師達にも出会いました。彼らは日本で学んだ知識、技術がいかに素晴らしかったかを語り、日本で出会った友人達のことを懐かしそうに話してくれました。日本で学んだことを母国で真摯に実践し、また後進に広めている現在の彼らを見て、かつての講習会は今も生き続けているのだと感激しました。国際協力の理想的な姿を見たように思います。

ニュースレター第8号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また前号に引き続き医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
TMDUと私	4
活動報告	5
プロジェクトセメスター	6

PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点(Latin America Collaborative Research Center,以下LACRC)のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象に免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を実施することになっており、3月末時点では全拠点で、約5,400が登録、約2,500名がiFOBTを終了しています。PRENECは、中南米諸国にも広がっており、現在エクアドル、パラグアイにてプロジェクト実施における取り組みが始まっています。本号ではエクアドルでのプロジェクトをご紹介します。

エクアドルにおけるPRENEC

エクアドルにおいて、大腸癌による死亡率が上昇傾向にあることを背景に、エクアドル政府の要請を受け、本学は2012年8月に、「エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間の大腸癌スクリーニングの実施のための覚書」を締結いたしました。現在、首都キトにあるパブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院(以下、スアレス国立病院)において、大腸癌早期検診のパイロットプロジェクトがスタートしています。スアレス国立病院病院は、エクアドル保健省直轄病院の一つで、プロジェクトはエクアドル保健省の支援の下進められており、本学はこのプロジェクトをサポートしています。このプロジェクトは、同病院の病理医であるモンタルボ医師を中心に行われ、CEOであるグアマンティカ医師によって全面的に支援されています。

パイロットプロジェクトは、免疫学的便潜血反応検査にて行い、チリと同様、栄研化学のOCセンサーおよび便潜血キットを用いています。検査方法や陽性陰性のcut off値も、チリにおけるプロジェクトと統一されており、チリのプロジェクトリーダーであるロペス医師のアドバイスを受けながら、進められています。

同病院の内視鏡施設においては、FUJIFILM製の南米における最新機種が2ブース分用意されているほか、十分な広さの検査室とリカバリー室を持った内視鏡室が設置されています。また病理診断については、日本の診断基準を導入したいという強い希望のもと、LACRC が提供した病理診断フォーマット(日本の診断方式に基づいたもの)を用いてデータベース登録しており、病理標本作成プロセスには、過去にJICAから援助された機材が有効に活用されているとともに、本プロジェクトに関する予算によって新たな機材も導入され、その環境は十分整備されています。

検診者に対しては、検査室前の待合スペースに設置されたテレビモニターにて、大腸癌や検査方法を含めたプロジェクトの解説ビデオを流すことで検診者への十分な説明・教育をおこなっています。

現地の内視鏡医・病理医・技師は、本プロジェクトに対しては大変前向きであり、またエクアドル保健省の支援体制も充実している様子が伺われます。



FUJIFILM製の内視鏡機器が設置されている内視鏡室の様子



プロジェクト用に新規購入された病理機材

第一回エクアドル日本・大腸病変講習会が開催

エクアドルにおける大腸癌検診プロジェクトリーダーであるモンタルボ医師からの要請で、内視鏡技術および病理診断技術の指導を目的として、スアレス国立病院にて、第一回エクアドル日本・大腸病変講習会(Primer curso ecuatoriano-japonés de lesiones colorectales)が本年2月4日から7日までの4日間に渡り開催され、LACRCより河内講師(病理分野)、田中助教(内視鏡分野)が講師として参加しました。

内視鏡分野においては、大腸内視鏡前処置の意義と方法、大腸内視鏡挿入テクニック、微小大腸病変の拾い上げ方法、内視鏡診断方法について講義を行ったほか、田中助教によるパイロットプロジェクトの患者に対する内視鏡検査を行うデモンストレーションを実施しました。

また病理診断分野においては、日本の大腸癌取り扱い規約の紹介、日本の診断基準の解説、早期大腸癌の治療方針にする最新の知見、大腸病変の診断に必要な免疫組織化学・分子生物学的知識の解説が行われました。



講習会の参加者と記念撮影



病理診断部門の講習会の様子



修了証を手にする講習会の参加者



在エクアドル日本大使館を訪問

寄稿：TMDUと私

本学は、JICA支援下の日本における研修会(早期食道・胃・大腸癌の病理組織診断)を通じて、中南米地域の医師の人材養成に協力して参りました。本号では、この研修に参加し、現在エクアドルのスアレス国立病院で大腸癌早期検診スクリーニングのパイロットプロジェクトを実施しているアレクサンドラ・モンタルボ医師にご寄稿いただきました。

アレクサンドラ・モンタルボ医師(エクアドル)

パブロ・アルトゥーロ・スアレス病院 臨床検査室長

2003年、私はTMDUにて開かれた「早期胃癌と関連腫瘍コース」に参加する機会がありました。このコースは、小池盛雄先生のコーディネートにより、中南米の参加者のために開催されたもので、私がリスペクトする日本のライフスタイルや文化・社会まで学ぶことができました。

コースでは、早期癌の診断と処置において重要な鍵となる癌や前癌性ポリープ、その他消化管の異常を検出するための診断技術についての講習を受け、早期病変の発見が早期治療に繋がることを学びました。

エクアドルには、1,466万人の人々が住んでおり、統計によると、大腸癌の発生率は、男性では10万人あたり10.2、女性では9.8という結果が出ています。男性は4番目、女性では5番目に多い悪性腫瘍です。首都キト、北部のロハのような都市では、その発生率が他の地域と比べて2倍の結果となっています。

この状況を鑑み、2004年にTMDUの江石教授は私が勤務する公立病院における大腸癌早期検診スクリーニングのパイロットプロジェクト実施を提案されました。これは便潜血検査と大腸内視鏡検査、及び病理組織学的検査を組み合わせた免疫化学的方法を用いるもので、1,000人を対象に実施し、1名に早期癌が見つかりました。この癌患者には、手術を実施し、5年以上生存しています。

2010年には、TMDUの招待により、CLCにて行われたLACRC開所式に参加しました。また、チリ・ウルグアイ・エクアドルの医師を対象とした「日智消化器癌検診コース」にも参加する機会があり、各国の大腸癌検診スクリーニングの情報共有をすることができました。

2011年8月は、TMDUより8名の医師がキトを訪れ、ハラ副保健大臣や今井駐在エクアドル大使、高井JICAエクアドル支所長と面会しました。この訪問のおかげで、エクアドルの癌予防対策において、大腸癌早期検診スクリーニングの実現は重要なポイントであることを関係者全員が再認識することになりました。

その後2012年には、保健省の科学技術部門より、スアレス国立病院における大腸癌早期検診スクリーニングの実装が採択され、機材・薬品購入、インフラ整備、人材確保のために410,000USドルの資金を獲得し、後日、64,870USドルの追加資金を得ることができました。更に2012年は、TMDUの医師が講師として参加されたエクアドル初の「胃腸腫瘍に関するシンポジウム」が保健省主催で開催されたほか、大腸癌早期検診スクリーニングを実施するため、TMDUと保健省の間で、国家レベルの協定を締結するに至りました。

2013年2月には、保健省主催、TMDU後援にて「第一回エクアドル日本・大腸癌講習会」が開催されました。TMDUの河内医師と田中医師を講師としてお迎えし、スクリーニングに必要な診断や検査



TMDU訪問団と記念撮影(右から2番目:モンタルボ医師)

略歴:

1995年にセントラル・デル・エクアドル大学医学部を卒業後、病理医としての研修を積む。ジャルキ病院の臨床検査室長を経て、2002年、パブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院の臨床検査室長に就任し、2004年よりトウンバコ・クリニックの病理・臨床検査長の兼任。

に関するテクニックを学び、参加者からは同様の講習会をもっと開催してほしいとの声が多数上がりました。

パイロットプロジェクトは、現時点で3,720名のスクリーニングが終了、9名の癌患者が見つかり、そのうち7名が早期癌でした。大腸癌検診スクリーニングは、延命が難しい進行性癌の治療費用よりも低い費用で行うことが可能です。(進行性の大腸癌における治療費用が平均で39,880USドルであるのに対し、早期の大腸癌における治療費用は平均で1,383USドルです。また、早期の大腸癌における5年以上の生存率が90%であるのに対し、進行性の場合、8~15%となっています)。本プロジェクトで最も重要なことは、治療可能な状態での大腸病変を発見することで沢山の命を救うということです。

最後になりましたが、エクアドルの医療関係者一同を代表して、TMDUの先生方に御礼を述べたいと思います。特に江石教授はエクアドルで大腸癌の罹患率と死亡率を減少させるために、プロジェクトの立ち上げにご協力いただきました。また、多大なる支援を行ってくださる日本大使館とJICAエクアドル支所、当初より本プロジェクトを支援し、国中で検診を行えるよう力添えをして下さっているエクアドル保健省関係者の方々にも深く感謝をしています。

JICAとTMDUとの協力体制は、長期的な視点で、社会支援を実現しており、その活動は成功を収めていると実感しています。

(翻訳:四宮)

活動報告

サンチャゴ日本人学校中学部による職場訪問

サンチャゴ日本人学校からの要請により、本年2月15日に、中学部による職場体験の受け入れを行いました。当日は、中学部の生徒3名が、CLCを訪問し、LACRCオフィスにて河内講師による病理部門の説明を受け、標本の観察を行ったほか、腫瘍学・分子遺伝学研究室にて小林助教の実験の様子を見学しました。また、田中助教が勤務するサン・ポールハ病院日智消化器病研究所も訪れ、内視鏡室にて内視鏡検査の見学を行いました。参加した生徒達からは、「患者さん1人1人に丁寧に診察をしていること、1つ1つの細胞を細かく見ていることなど、とても集中力が必要な仕事だという発見があった」、「ドラマで見るような現場を見せていただけて本当に嬉しかった。貴重な経験ができた。」等のコメントがあり、大変好評でした。若い世代に医療の道に興味を持ってもらえるよう今後も積極的に見学体験学習に貢献してまいります。



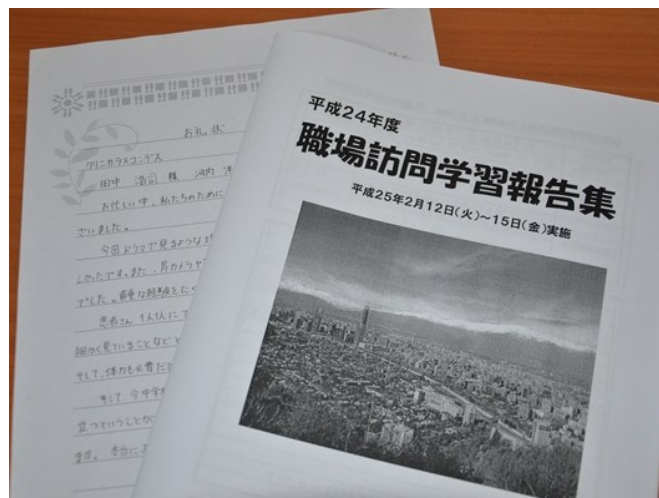
田中助教のもと、内視鏡を手にする生徒



小林助教の実験を見学



河内講師の指導のもと、標本を観察



学生からの礼状と日本人学校発行の報告集

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、6名の学生が10月11日～2月17日までチリに滞在しました。前号に引き続き、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

4ヶ月半の研究生活 そこで築けたもの

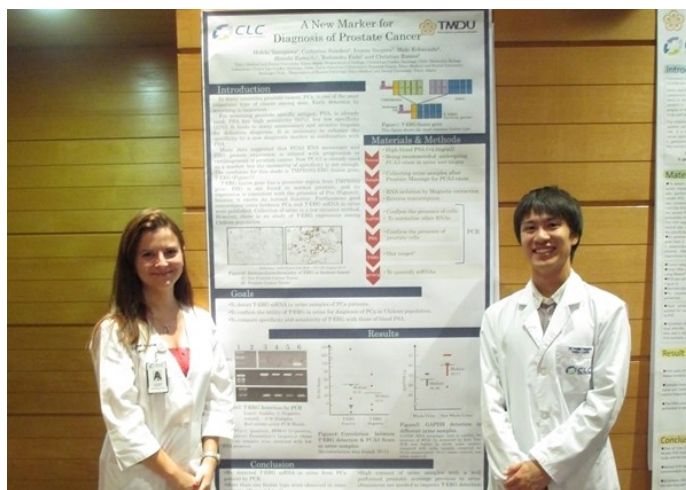
柳川英輝 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属(前立腺癌)

私は医学科4年のプロジェクトセメスターという研究室に約5ヶ月間所属させていただく期間に、チリのCLCにある泌尿器科の研究室にお世話になりました。研究テーマは前立腺がんのスクリーニングに用いる新たな腫瘍マーカーの評価です。尿採取による検査ですので侵襲が小さく、現在臨床の現場で用いられている腫瘍マーカーと組み合わせることでより良いスクリーニングが行えるのではないかと期待されています。私が行ったのは、サンプル内の標的RNAの有無、濃度を計測し、臨床現場の診断と比較検討するというものでした。病院内の検査室の機器も使わせていただけるなど、設備も十分に用意して頂き、順調に研究を進めていくことが出来ました。

研究室での生活のお話をさせて頂くと、研究室には泌尿器科の他、消化器外科の方もおり、スペースを共有していました。ですので、大変賑やかな雰囲気でした。ですので、研究室で働く方々の中で泌尿器科に属するのは私の指導担当、Ms. Sanchezただ一人でしたので、この方との二人三脚で研究を進めていくこととなりました。大変丁寧な指導をして頂き、充実した研究を体験できた一方、日常のコミュニケーションには少し苦労もありました。というのも、Ms. Sanchezと仲の良い技士の方たちはスペイン語しか話せず、話の輪に入ることが出来ず苦い思いをすることも少なくありませんでした。また、プログラムの最後に打ち明けられた話では、Ms. Sanchezも男子大学生と何を話せばいいのかと初めは困っていたようです。この様な関係から徐々に良い関係を築いていけたことも良い経験となりました。

研究室の外の日常生活は先進国に引けをとらない水準でした。大きなショッピングモール、スーパー、充実した交通網、整備の行き届いた上下水道、町をきれいに保つ清掃員。南米の地で、蛇口の水を生で飲めるとは想像もしていませんでした。それでも唯一の苦労はやはり言葉です。街中では英語はほとんど通じず、片言のスペイン語を使いながらの生活でした。それでも東洋人の珍しさからか、デパート中を案内してくれた店員さんや、自分の名前の漢字の当て字を教えて欲しいと言ってくる店員さんなど、温かな交流もあり、素敵な生活になりました。そして、スペイン語が上達するにつれ、店員さんの反応も、文化に馴染んだ東洋人を歓迎してくれるようになり、大きな達成感を味わえました。

もう一つ、チリでの夏休みに頂いた時間で経験した南米について



指導担当のMs. Sanchezと研究発表会にて



旅行で訪れたマチュピチュでの一枚

書かせていただきます。チリは南北に長い国土を持ち、北には砂漠が、南には氷河が、そして南極大陸にも隣接しています。それほど広い国土でありながら、どこへ行っても人は温厚でまじめな人ばかり。しかし、ひとたび国境を越えてペルーやボリビアに入ると、その違いに驚かされます。チリが南米の地で強い経済力を発揮している土台に触れられた気がします。

最後に、このような素晴らしい研究生活を遠いチリの地で送ることが出来たことは多くの方々の支えがあったからこそです。LACRCの河内先生、田中先生、小林先生、四宮さん。そして日本よりこのプログラムを支援して下さっている江石教授、人体病理の方々、菅原さんをはじめとする大学の方々。多くのお力をお借りでき、無事プログラムを終了できたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

地球の裏側へ 感謝を込めて

大木紗弥香 チリ大学医学部神経科学研究所所属

チリから帰国して1カ月が経とうとしていますが、ニュースなどで「チリ」という言葉を聞いたり、スペイン語を耳にしたりするたびにチリでのことが懐かしく思い出されます。あまりにチリでの生活が当たり前すぎて、またあと1カ月ほどしたらサンチアゴに戻るのではないかと錯覚してしまいます。

私はチリ大学医学部の分子細胞神経生物学教室にて、大脳皮質における神経発生過程に対する転写因子の関与についての研究を行いました。研究内容はかなりspecificで複雑なもので、理解するのは容易ではありませんでしたが、元来自分の興味のある分野ということもあり、研究を進めていくことが楽しかったです。また月に一度CLCで開かれる月例報告会では、英語で研究の進捗状況を発表し、質疑応答をこなす必要がありました。最初はとても緊張しましたが、共通言語としての英語の重要性を実感すると同時に、将来にむけてよい機会を与えていただいたと思っています。

ただ、研究の途中で購入した抗体が失活していたり、日本とは違うチリの時間感覚に苦労したりで、このままでは何も研究成果を日本に持ち帰れないのではないかと真剣に悩んだ時期もありました。

その際にはLACRCの河内先生、小林先生には相談に乗っていただいたり、レポートを校正していただいたりと大変お世話になりました。海外で研究生活を送る難しさを身をもって体験することになりましたが、それもこれからの糧になったと思っています。

一方で、研究室生活はとても楽しいものでした。研究室の方々と昼休みにアイスを一緒に買って食べながら『となりのトトロ』の話で盛り上がったり、チリ料理のレストランに連れて行ってもらったりと、色々と気を配っていただきました。何よりも、半年間限りの私を研究室の一人の仲間として扱ってくださったことがとてもうれしかったです。そして、研究室での最終日にはサプライズでケーキを買ってきて下さり、研究生活の終了をお祝いして下さいました。ただ、私はお祝いという気分には全くなれず、もうこの研究室に来るのも最後と思うと寂しさで一杯でした。その後一人一人お別れを言いに来て下さった時には、涙が止まりませんでした。「世界は小さいから、会おうと思えばきっと会える」と口々に励まして下さったことが忘れられません。

この半年間、私達はチリの方々に大変親切にいただきました。最初は言葉も分からず初めての土地でとても心細かったのですが、半年間を充実したものに出来たのは皆さんのサポートがあったからに違いなく、感謝してもきれません。その方々に私が何を返せるかを考えた時、自分にいただいた分をその方々に全て返すことは難しいでしょう。私にできることは、今度は自分が、日本に來ている留学生やチリの人はもちろん、周りの人に親切にすることなのだと思います。



研究室でのお別れパーティにて



日本語を勉強しているサンチアゴ大学の学生と

編集後記

私事で大変恐縮ではございますが、この度新しい命を授かり、4月より産休・育休に入るため、休職させていただくことになりました。後任は、Jaime Urrejola(ハイメ・ウレホラ)が担当させていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。今後ともLACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので、引き続き、ご愛読の程宜しく願いいたします。

(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 8, March 2013

[発行日] 2013年3月29日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl